

# 東アジア レビュー

2026年4号

[HTTP://EARI.JP/](http://EARI.JP/)

- 【視点】 延期された4月米朝首脳会談はどうなる？** …1  
姜 英之
- 【南の窓】 イラン戦争で問い直される在韓米軍** …3  
編集部
- 【北の窓】 金正恩神格化は成功するか？** …5  
編集部
- 【編集後記】** 編集部 (Y/K) …7

# 【視点】延期された4月米朝首脳会談は どうなる？

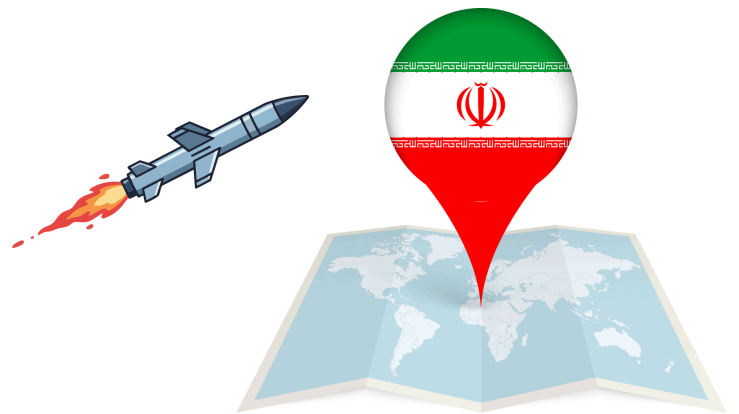
姜 英之（東アジア総合研究所理事長）

## イラン攻撃で、首脳会談の環境は喪失

米国のイラン攻撃で、ホルムズ海峡が事実上封鎖されて原油価格が暴騰し、世界経済を混乱させている。イランの核・ミサイル開発能力を破壊するための今回の攻撃は、北朝鮮の核・ミサイル開発成功という手痛い教訓を踏まえての荒業に見える。北朝鮮「非核化」が、完全に非現実的な課題となってしまった現在、対北交渉では、弱い立場に立たされ、取りつく島もない状態である。北朝鮮の核兵器・ミサイル開発の高度化は、日進月歩で進んでおり、もはや、いかなる手段方法を使ってでも非核化を実現しえない状態は、世界最強の軍事国家、米国の体面にもかかわる問題であるが、米国は、ただ、トランプ大統領が、手を拝んで対話をしてくれと拝むあたり、米国の歴代対北朝鮮政策の失敗を如実に示すところだ。こうした無様な姿を中東地域で再現したくないと、軍事力に物を言わせて大々的な軍事攻撃に打って出たものの、イランはたやすい相手ではなかった。最高指導者ハメネイ師殺害は成功したが、イラン国民のさらなる反米感情を掻き立てる結果となり、徹底抗戦による、戦争の長期化は避けられず、泥沼化に陥ろうとしている。

ウクライナ戦争、イラン戦争、次は、キューバ攻撃か、とトランプ大統領の見境のない「力による平和」は結局失敗の運命を免れない状況だ。東アジアにおい

て最大の外交課題であるから、対中政策を抱えて、北朝鮮の核・ミサイル開発阻止という課題は後回しにされているが、このまま北の動きを放置すると、米国本土にまで到達できる長距離弾道ミサイルの発射実験、また核実験の再開もありうる。これは阻止すべき喫緊の外交課題であるため、何とか、対話と外交に持ち込みたいところだ。そのためには、トランプ大統領としては、金総書記との首脳会談を早期に実現したい。3月末から4月初めにかけて習近平総書記との首脳会談のため訪中の計画だったので、そのついでに金総書記と会うつもりだったとの見方もあった。しかしイラン戦争の膠着化で、訪中延期が発表され、訪中の際に金総書記との首脳会談がありうるとの観測も消えた。



## 対米強硬策の裏には、 経済問題の弱みも

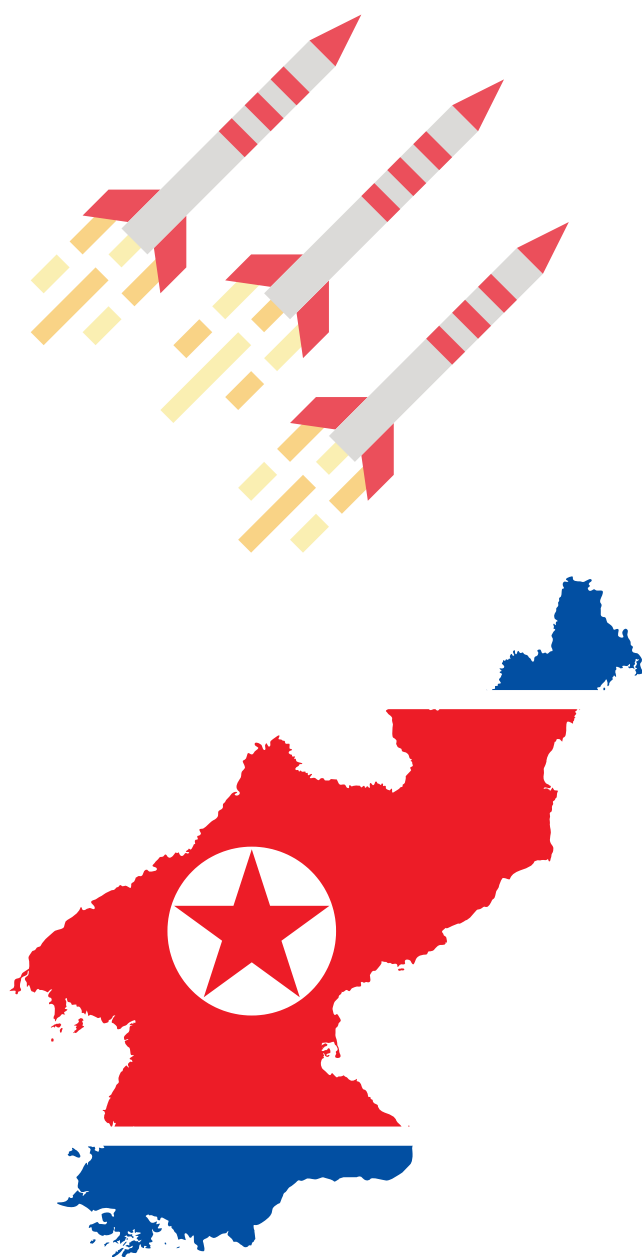
北朝鮮は、米国のベネズエラ大統領拘束、イラン攻撃に対し強く非難しており、3月9日に韓国で開始された米韓合同軍事演習「フリーダムシールド（自由の盾）」に対しても、対北核戦争演習だと、厳しい非難を繰り返した。金総書記がたやすい条件でトランプ大統領と会う環境はなかった。

案の定、北朝鮮は3月10日、就役を控えた5千トン級の新型駆逐艦「崔賢」から、複数の戦略巡航ミサイルを発射する実験を行った。4日にも「崔賢」から同様のミサイルを発射したばかりだった。参観した金正恩総書記は「大きな満足」を示し、「国家核戦力は多角的な運用段階に移行した」と強調し、地上発射型の弾道ミサイルに加え、海上や水中からの核攻撃に向けた体制整備に自信を示した（産経新聞3月12日付）。韓国の専門家は、飛行距離が1800～2000キロで、日本列島や韓国全土が射程に収まり、日韓の安全保障を脅かすものと評価した。

北朝鮮の反発は、これにとどまらなかった。14日には、平壤郊外の順安付近から、日本海側に向けて弾道ミサイル十数発を発射した。一度に10発以上発射するのは異例のことだ。弾道ミサイル発射は、今年に入って3回目である。金総書記の実妹・金与正労働党部長は10日、米韓演習に対し「敵対勢力の軍事的示威は、恐ろしい結果を招きかねない」と警告、さらなる核・ミサイル発射の示威を示唆した。

だが北朝鮮は、相次いで開催された第9回党大会と最高人民会議を通じて、対米や対日関係に言及しないまま、もっぱら経済成果だけを誇張されていることから、逆に経済困窮の国民をなだめるための逆宣伝と

も受け取られる節がある。執権から15年を迎える2027年に向けて、「金正恩時代」を築くためには、経済的豊かさを国民に実感させなければならない。そのためには、米朝、日朝国交正常化をして、西側との経済協力が望まれる。そこへ向かう関門が米朝首脳会談であるから、制裁の一部解除、事実上の核保有国認定さえ条件として受け入れられれば、金総書記は、早期にトランプ大統領と手打ち式を行いたいのが本音でなかろうか？



# 【南の窓】イラン戦争で問い直される在韓米軍

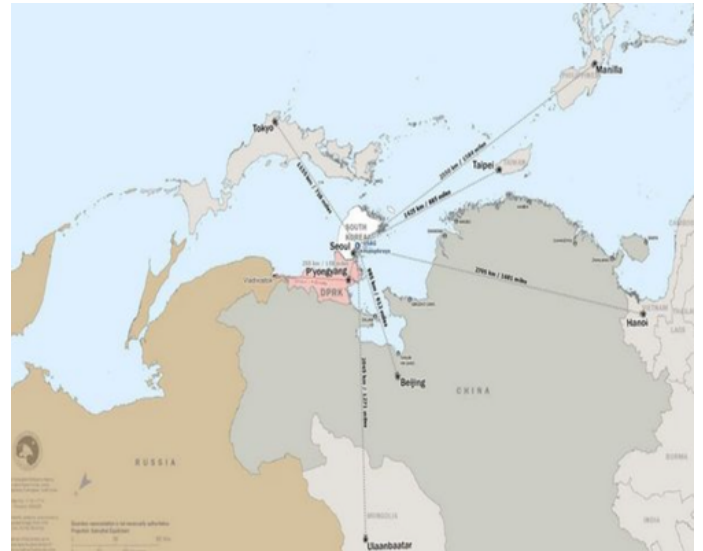
編集部

## 急変する安保環境

米国とイスラエルによる武力行使とイラン側の反撃で、中東の石油に経済依存する韓国や日本はじめアジア太平洋地域の安全保障環境が大きく揺らいでいる。トランプ米政権による世界各地の紛争拡大の一環で、今後もさまざまな影響を受け続けるだろう。

その中で、北朝鮮の脅威に備えて朝鮮戦争後、1950年代から「朝鮮半島に張り付いてきた」在韓米軍（公式人員2万8500人）の役割が大きく変わろうとしている。実は第2期トランプ政権になって以来、中国けん制に集中させる方向で在韓米軍の1個機甲旅団を中心とする陸軍1万8千人の比重を減らし、海軍、空軍の能力を高めようとする動きが目立っていた。陸軍の戦車、自走砲、装甲車、ヘリコプターは常時固定配備戦力なので、朝鮮半島を離れて作戦を展開するのは難しいためだ。

2025年11月17日に在韓米軍ホームページに、東を上にした地図が掲載された（右図）。普通の地図は北を上にしてはいるが、左側に倒して東を上にし、司令部のある京畿道平沢（ピョンテク）のキャンプ・ハンフリーズを中心とし、台北（1425キロ）、マニラ（2550キロ）、北京（985キロ）、東京（1155キロ）、平壤（255キロ）、ウラジオストク（805キロ）と直線距離が書き込まれている。ブランソン司令官（米陸軍大将）は今年1月15日に開かれたハワイの防衛フォーラム演説で「韓国は堅固な防衛産業、徴兵制に裏付けられた強力な軍事力を持っている。米国から、重要ではあるが今よりは限定的な支援を受けながら、中国の主張する『第1列島線』（九州-沖縄-台湾-フィリピンをつなぐ線）の内側で米軍が常駐する唯一の場所であり、主な責任を負える能力を備えている」と



在韓米軍の「東を上にした地図」



米軍世界分担。「太平洋軍」（灰色）と左「中央軍」。

「戦略的中心地」になりうると高く評価した。このような考え方だと、台湾海峡有事の際、韓国が米国と中国の対決の真ただ中に入る恐れがある。

3月4日に北朝鮮の国連制裁違反を警戒していたオーストラリア海軍が黄海上空で、フリゲート艦「トゥーンバ」から軍用ヘリを飛ばしたところ、中国海軍のヘリが異常接近してきて回避行動を迫られた、と中国を批判する声明を発表。北朝鮮船の「瀬取り」を監視していたが、日本の海上自衛隊との共同訓練「日豪トライデント26」にも参加していた。

黄海上空では在韓米軍が2月18日にF16戦闘機約10機をソウル南方にある平沢の烏山基地から黄海上空に展開し、韓国防空識別圏（KADIZ）と中国防空識別圏（CADIZ）の間の両国の防空識別圏が重ならない区域で空中訓練を行った。その際に中国が戦闘機を出撃させ、米中両国の戦闘機が朝鮮半島付近で一時対峙したことが20日に判明したと韓国の大手紙「中央日報」が報じている。進歩・革新系の与党「共に民主党」に近い「ハンギョレ新聞」によると、朝鮮戦争中の1951年3月、中国の介入で軍事情勢が逆転したため、中国空軍が保有するミグ15などソ連製戦闘機が飛来しないよう警戒のため米軍がKADIZを設定したとされる。韓国の防空識別圏は北朝鮮領空の一部を含んでおり、中国の山東半島すぐ手前まで広がっている。一方で、中国の防空識別圏は自国の沿岸に沿っている。海上での「北方限界線」と同様に、朝鮮戦争の歴史が現在まで影を及ぼしている。

## 避けたいベトナム戦争の悪夢

米紙ワシントン・ポストは3月9日、韓国に配備された高高度防衛ミサイル（THAAD）の一部を米国防総省が中東地域へ移動させていると報じた。機密の軍事情報なので移動の詳細は明らかでないが、韓国の慶尚北道・星州の基地に置かれていた高高度防衛ミサイルを発射車両ごと京畿道の烏山空軍

基地に移動してからミサイルだけ降ろしたと韓国メディアは報じた。これを米軍の大型輸送機が中東地域まで運んだもようだ。また全羅北道の群山（クンサン）など韓国内の別の米軍基地に配備されていたパトリオット・ミサイルなども烏山基地へ移送されたという。パトリオットがアラブ首長国連邦（UAE）へ向かったという報道もある。韓国の防空体制は①THAAD（40～150キロの高高度）②国産の天弓（チョングン）2と米国製パトリオット3（30～40キロ前後の中高度）③パトリオット2（20キロ前後の低高度）という三重になっている。

李在明大統領は3月10日の閣議で、「（搬出により）北に対する抑止戦略に深刻な障害が生じると問われるなら、決してそうではない」と国民の不安をなだめた。

イランでの戦闘継続の影響は、在日米軍にも及んでいる。佐世保にいた米海軍太平洋第7艦隊の強襲揚陸艦「トリポリ」が沖縄で第31海兵遠征部隊を乗せて中東に向け出港した。3月17日にはマラッカ海峡を通過している。

記事冒頭の右図「米軍の担任地域」のように、中東を統括する「中央軍」支援で「太平洋軍」から装備、人員が移動している。

秋の米中間選挙前の石油価格上昇を避けたいトランプ大統領が停戦へ持ち込む可能性ははっきりしないが、東西両陣営が対立する冷戦時代から時代も一変しているとはいえベトナム戦争の二の舞や、世界戦争への拡大は何としても回避したいところだ。



UAE国防省が導入決定時に発表した『天弓2』

# 【北の窓】金正恩神格化は成功するか？

編集部 (Y/J)

## 5か年計画達成は誇張か

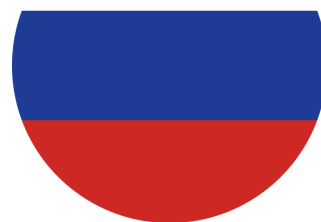
北朝鮮の第9回労働党大会が3月19日から25日まで開催された。昨年末の報道では、年初に開催されるとの予測があったが、1月中には開催されず、2月にも開催されず、結局は3月にずれ込んだ。

この背景には、過去5年間の経済建設に関する総括事業が遅れたこと、対米外交関係の対策の遅れなどとともに、「白頭の血統」に連なる3代世襲体制の揺らぎを立て直すための金正恩総書記の神格化作業に手間取ったのではないかと推測される。

まず、経済問題であるが、金総書記の報告では「社会主義建設の基本戦線である経済分野で人民経済発展5か年計画が基本的に完遂された」とし、「我が国経済の少くない分野が長い間の老朽と沈滞から抜け出し、計画的に活力をもって前進できるようにする一定の土台と潜在力が固められた」と評価した。

特に計画期間後半に国家的事業として強力に推進された「地方発展20×10政策」の成果を強調した。これは、経済の失敗を自認して閉幕した5年前の第8回党大会の時とは完全に異なっているが、決して額面通りには受け止められない評価と言える。1月予定とみられていた第9回大会が大会がずれ込む中、経済計画完遂報告のため最後の大詰めを迎えた2月20日、基幹産業の設備生産工場の竣工式に参観した金総書記が、内閣幹部たちの「無責任性」を叱咤し、事業を担当した内閣副首相を現場で即刻解任した事実は経済建設がうまくいっていない現れであり、それは、氷山の一角だとも推測されるのだ（聯合ニュース1月23日）。

経済建設がうまくいかず人民の生活向上が図られない場合、人民の不満が蓄積され、政権の土台が揺らぎかねない。それに加重する要因として、韓国からの「韓流文化」の流入によって人民にはびこる金権主義、物質主義の蔓延があり、特に若者の間での思想意識の低下が深刻な政権危機の要因となっている。そこで、第9回直前の1月16日、平壤の金日成競技場で社会主義愛国青年同盟創立80周年記念行事が大規模に行われ、金総書記自らが出席し、先頭に立って「革命事業の継承」を訴えるほどであった。金総書記は世界の動向に触れ「極度の人間憎悪と黄金万能主義の毒素、墮落した青年たち」の現状を指摘しながら、「党に忠実な若い革命家に成長するよう」促した。記念行事にはロシア派兵軍人も参加し、金総書記は、「朝鮮の誇るべき青年たちだ」とその愛国性をたたえた。



## 金正恩忠誠分子中心の権力再編

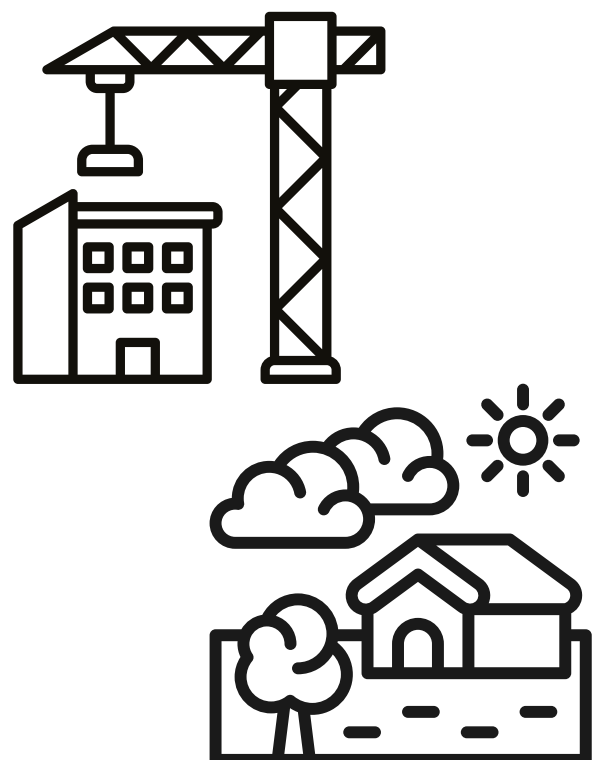
注目すべきは、第9回党大会と続いて開催された最高人民会議代議員選挙においての党中央委員と代議員の圧倒的な数の交替である。北朝鮮において権力の中核であり、出世頭とされる党中央委員は5年前の第8回大会時と比べると、中央委員139人と候補委員111人、合計250人のうち130人（52%）が入れ替わった。高齢世代が一斉に退き、大幅な世代交代が行われた。

特に目を引くのが、パルチザン第2世代を代表する崔龍海・最高人民会議常任委員長の脱落である。金日成抗日パルチザン出身の崔賢・元人民武力部長の息子で、2019年から、7年近く北朝鮮の公式儀典序列第2位にあった人物で、金正恩総書記の側近中の側近であった。軍部権力においても、金正恩体制で軍序列1・2位を争った朴正天党書記と李炳鉄・党軍需政策担当相顧問が共に中央委員から抜けた。また、「対南通」と知られる実力者、金英哲・党顧問と李善権・党第10局（旧統一戦線部）部長らも中央委員名簿から消えた。

最高人民会議代議員選挙では、70%が新旧交代した。こうした、北朝鮮権力機構の大幅な人事再編と新旧交代は、「金正恩総書記が先代に依存せず独り立ちすることを宣言したもの」「金総書記自ら抜擢した人物を中心に権力を再編したことを意味する」と慶南大学の林乙出教授は語る。

党大会4日目の会議では、金正恩氏が総書記に再推挙された。労働新聞「政論」（2月25日付け）は金総書記の再推挙で「全国人民が尽きることのない激情と歓喜で胸を躍らせている」とし、この5年間について「ほかの人たちが数百年かけても成し遂げることができない巨大な成果を達成し、体験させた」と評価し、「一言で言えば、それは奇跡の物語」とし、「絶対の軍事力」「建設の大繁栄期」「地方変革の時代」と金総書記の業績を持ち上げ、金総書記を「天下第一の偉人」とまで絶賛した。

ここまで来ると、金正恩神格化の本格的始まりと見える。だが、建国の祖、金日成神格化によっても、北朝鮮社会主義は成功しなかった。人民に飯を食わせる永遠の課題も残されたままである。神格化を進めれば、進めるほど、北朝鮮国家を支える人民の支持基盤は弱体化して、金正恩政権の墓穴を掘ることにならないか？



# 【編集後記】 高市首相の軽妙な物言い

編集部(Y/K)

高市早苗首相が3月19日、トランプ大統領と2回目の首脳会談をホワイトハウスで行った。

イラン情勢をめぐり、ホルムズ海峡で民間船舶を護衛する艦船の派遣を求められるのは必至だったため、日本の対応が世界的にも関心がもたれたが、結果は、良くしのいだものだと感心した。イランに石油依存する日本の立場としては、イランを敵に回したくないし、台湾問題を抱えている中、米国との日米同盟は壊したくないし、板挟みの苦しい立場であったが、会談の冒頭で「中東の平和と安定をもたらすのは世界でただ一人ドナルドだけだ」とトランプ大統領を持ち上げたのだ。これは、「力による平和」という論理のトランプ大統領のイラン攻撃を支持するかのようで、良く深読みすれば、早く停戦せよとトランプ大統領に迫った発言とも読み取れる。単にトランプ賛美の発言でないことがわかる。

また、艦船派遣に対しても、「日本の法律に従って、できることはできるが、できないことはできない」とさらりとかわした軽妙な言い回しも功を奏した。面と向かって拒絶するより、日本の法律を盾にとって、やんわり拒否し、トランプ大統領を言い含めた外交手腕は褒められてよいだろう。ただし、巨額の対米投資を、ほとんど受け入れざるを得なかったのは、今後の禍根として残る可能性があり、首脳会談の成否を評価するには、今後を待たなければいけない感じである。難しい局面にある国際情勢の中、トランプ大統領に物おじせず、日本の国益という観点からの外交手腕は、成功の出来栄えであったと評価したい。

東アジアレビュー 2026年4月号

第36巻・第3号 通巻 225号

2026年4月1日発行

発行人 姜英之

編集人 小野田明広

発行所 一般財団法人 東アジア総合研究所

TEL 03-6231-2361 FAX 03-6231-2862